

# 吉井源太と明治

《17》

## 吸墨紙に仏から商談

村上 弥生

### 「土佐紙業の恩人」没後100年

吸墨紙は、書写の際に余分な墨汁を吸収させるために用いられる紙のこと。西洋紙は、紙面がなめらかで、ペンの運行は極めてよいが、紙質が弱い。

また墨汁の吸収が遅く、書いた後すぐに吸収させなければ、他の紙面を汚し、字を乱したりする。このため、吸墨紙という紙が必要とされた。吉井源太がこれを海外へ向けて販路を開いていった様子は次のようだ。

「日本製紙論」によれば、明治十八（一八八五）年にアメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオーリンズで開かれた万国博覧会に出品した。

前年の日記には「亜米利加合衆國 万国博覧会出品

の記」として、出品する予定の紙の名前と原料の配合などが書かれている。この時出された紙は、「一、薄葉大具帖 一、薄葉函写 一、厚地函引紙 一、手紙用紙 一、墨取紙 一、薄葉記録紙」（原文ママ）となっている。この時、墨取紙はアメリカ人の注意を引き、高等の賞をもらった。ただし、輸出には至らなかった。

この博覧会に出かけていた印刷局の知人が、結果をみてアメリカから源太に手紙で注意をくれたことがあったらしい。日本製の吸墨紙は質が柔らかすぎて毛羽立つのが難点である。これを改良して質を堅くすることができればよいということだった。

これを受けて源太は改良を加え、同二十五（一八九二）年にアメリカ・シカゴで博覧会が開かれた時に再度出品した。この時は特別

優等の賞を受けた。その結果、フランス、オランダなどから見本の注文があった。

同二十七（一八九四）年

の日記に書かれている、フランスからの注文のいきさつはこうだ。

リヨンのモロオ街、ダモアシロールという人から「親族の者がシカゴ博覧会で貴殿製造の紙を見たと言ってきた。ついては、紙の価格表と見本を送って欲しい。

価格表はできるだけフランス語で願いたい。もし取引が成立した場合、リヨンは日本領事館もあるので、支払に何の問題もない」という手紙が来た。

これに対して源太は、紙の種類と一万枚あたりの値段を書いた返事を出した。紙の値段の比較もできるので、書き出してみよう。

二号 コッピ―紙 一万枚 代百四十円  
三号 薄函写紙 一万枚 代六百元  
四号 吸墨紙 一万枚 代百六十円

同二十九（一八九六）年にはオランダ・アムステルダム市のモウターン商会というところからの見本注文があった。この時にも吸墨紙が求められていた。

源太は、海外諸国においても自国製の吸墨紙があるのだから、それをしのぐほど進歩したものをつくり、認めてもらわなければ海外からの需要は増加しないとして、製造業者へ努力をよびかけている。

一号 典具帖 一万枚 代二百四十円  
（京大大学院研修生、京都府在住）



シカゴ博覧会で吉井源太に贈られた特別優等賞（この町紙の博物館蔵）